

大規模講義運営手法の現場報告と検討

泉 敬 史

はじめに

平成 15 年度春学期に開講した共通科目「日中関係論」は 376 名が履修登録し、大教室での講義となった。これは私にとって初めての経験であり、いままで抱えてきた大規模講義でのいくつかの課題に、緊急に対応を求められる事態となった。また、効果的な「講義経験」も得たいと考え、いくつかの新たな取り組みを行った。春学期が終了したいま、以下にその報告と検討をする。なお、講義内容の充実がこれら課題への重要な対応策であることは言うまでもないが、ここでは講義それ自体には触れず、講義運営の手法に関する報告と検討にとどめる。

1. 想定した課題

私の担当科目は中国語が 4 コマ (14 年度) といちばん多く、履修者数は最多で 57 名 (同年度) だった。「日中関係論」は 13 年度から文化学部を除く共通科目として通年で開講し、初年度が 33 名、14 年度は 238 名が履修した。それが 15 年度から全学共通の春学期科目となり、376 名の大規模講義となった。

大教室での講義手法に関する課題として想定したことは主に以下の 3 点である。

- ① 確実な出席確認
- ② 受講秩序の維持
- ③ 理解度・満足度の把握

13年度の履修者33人にとどまった「日中関係論」については、語学の授業同様の手法で対応した。つまり、出欠は座席を指定して履修者全員の顔と名前を一致させることにより自ずと確認し、視覚教材を適宜差しはさみ、指名回答を多発して秩序と集中度を維持し理解度を把握した。ところが14年度の238名履修となるとそうはいかなかった。

2. 14年度「日中関係論」での諸課題

まずは出欠の確認である。この人数になると顔と名前の完全な一致は困難(13年度に海外研修に行かれた先生の代理講義で、93名と82名の履修者に試みたのが限界だった)で、別のやり方が必要だった。毎回名前を呼んで出欠をとる、あるいは受講票を使用する等方法はあるが、これらは効率と厳正さの点で最上の手段とはいえない。そこで履修者に専用ノート(「提出ノート」と呼んだ)を用意させ、それに講義内容に関するレポートを授業の終わり20分程度で書かせて毎回提出させることとした。この措置は確実な出欠確認を可能にすると同時に、講義への理解度や満足度を知る手がかりともなり、コメントを添えて返却することによる履修者個々との「やりとりツール」としても有効に機能した。しかし、毎回200冊以上のノートを抱えて教室を行き来するのは思った以上に大変で、また、履修者リストへ出欠やレポート評価を転記するだけでかなりの工数を要する等、改善の余地も認められた。

受講秩序の維持にも新たな検討を要した。具体的には遅刻と私語に対する方策である。語学の場合は毎回開始チャイム直後に小テストを行うことで定刻前着席を促し、指名回答を多発して私語をするスキを極力与えないといった対応ができるが、238名の講義ものとなると同様の手法は使えない。「提出ノート」を参考に、できるだけ学生が集中できるような講義を準備したり、冒頭に視覚教材を使用して「遅刻者待ち」をしたり、私語はその都度厳しく注意するといった対応をしたが、十分な対処ができたとはいえなかった。

理解度・満足度の把握には「提出ノート」が役立った。しかしこれは、「一部

の履修者については」というべきで、板書用と混用したり自由記述と勘違いしたりと把握に役立たないものも多く、また何よりも誤字が多かった。リテラシーを含めた「レポートの書き方」指導が必要であることがよく分かった。そこで後期からはノートを廃し、毎回 A3 版のプリントを配布して、左半分にはその日の講義内容の骨子を記し(サンプル①)、右半分にレポートを書かせて切り離して提出させることにした。レポート記述欄の上には記述上の留意点を箇条書きし(サンプル②-①)、成績評価の根拠とすることを強調した。この措置は記述内容の向上以上に、ノートを持ち運ぶ労力(かなり重かった)を無くし、履修リストへの転記上の手間を軽くするのに役立ってくれた。しかしペラ紙の返却には時間がかかる。やむなくこれを取りやめたせいで履修者とのやりとりの手段を失う結果となり、これは反省点となった。共通科目としての本講義が、日中関係に関する広域で常識的な出来事を認識し、そこに履修者個々の知的な興味・関心の発露を目指すことはシラバスに明記したところである(サンプル③)。毎回のノートのやりとりは、彼らの疑問に個々に答えることによりこの主旨に見合った手ごたえを感じさせてくれただけに、これは課題として残された。

3. 15 年度春学期「日中関係論」での状況と対応

15 年度から「日中関係論」は全学共通科目となった。履修機会が増える以上、履修者数の減少は考えにくく、上述した課題がそのまま引き継がれることは事前に予想できた。しかし実際の履修規模は、初回講義の教室に行ってみるまで分からない。一応前年並みを想定し、諸課題への準備を整えて 4 月 15 日の初回講義に向かった。割り当てられた 1403 教室は立錐の余地なく、急遽 3102 教室へと変更措置をとった。用意したプリントを 150 枚増刷し、履修者全員に配布したが、そこに書いた「とりきめ事項」はこれだけの人数を想定しておらず、その事態をまず報じて、今後の変更がありえることに理解を求めた上で説明を始めた(サンプル④)。

4. とりきめ事項

とりきめ事項を列記したプリント（サンプル④）を初回講義のはじめに配布し、こうしたい理由を説明した上で全員の同意を確認した。

②の遅刻に関してはとりきめに含みを残した。学期を通じて遅刻者は多くはなかったが、なしという日はなかった（→課題1）。

③を取り決めた理由はふたつある。第一は履修者の顔と名前を一致させることだった。学生の顔を覚えることはいろいろと有益である。また、顔を覚えたいのだからなるべく前の席に座るように促して、学期を通じて全員を前詰めに着席させることができた。第二は座席表を作成し、私語の抑止とプリント配布に活用することだった。私語は許さない。気づき次第注意する。二度目の注意で退出を求める。しかし大教室では目が行き届かない。近隣にうるさい者がいたら座席番号で知らせること。手元に座席表があるので特定できると話した。しかし、最終回のアンケートにも私語公害の訴えが散見され、徹底できていなかったことが分かった（→課題2）。

A3版のプリントには、その日の講義内容を講じる順に項目立て、余白をとって書き込みもできるようにした（サンプル①）。右半分はレポート記述欄であり、切り離して毎回提出させる。このプリントは「使える資料」なのであり、付加価値を認知させるためにも一人一葉で配布したかった。教員が配布する教材への「ありがたみ」は、真剣に聴講する動機づけになりえる。そこで座席表通りに厳正に枚数を配るつもりだった。しかしこれは予想以上に煩雑で現実的でないことが分かり、やむなく一斉配布に切り替えた。

出欠確認は提出されたレポートで確実に行うことができた。しかし順不同で提出させるため出席簿（履修者リスト）とのつけあわせにかなりの手間がかかった。そこで履修者リストにある連番を履修者個々の背番号として全員に通知し、学籍番号ではなくこの背番号を氏名と並べて書かせることにより、この工数は格段に低減できた（サンプル②-②）。ただし履修者リストの発行は学期開始か

ら一ヶ月以上後なので、その間の対応が問題となる。今後より早くアウトプットされることを期待する。

④の二部制は、講義への集中力を維持するために導入した。講義は40分以内とし、そのかわり集中して聴くというメリハリを履修者に求めた。第一部60分の内、はじまりの20分は前週のレポート講評にあて、残り40分で講義、第二部はレポート書きという目算だった。講評では⑤にとりきめた通り「ピカイチレポート」を公表し、代表的意見や少数意見へのコメント、質問への回答や助言を行い、履修者との「やりとり」を復活させた。

問題は時間配分で、どうしても後ろにずれこんでしまう。講評で前週までの講義を反すうし、そこに「レポートの書き方指導」を差しはさむ内に講義時間にずれこんでしまい、講義を終えてレポートにとりかかるころには残り時間10分ということもあった。これは「学生による授業評価アンケート」にもいちばん多く書かれたところで、「もっと考えて書く時間が欲しかった」という指摘は大きな反省点となった（→課題3）。

一方、記述開始と同時に提出する者もいて、これは講義中に書き始めたに違いなく、明らかにとりきめの主旨と反している。制度としてこれが行われなようにする工夫が必要である（→これも課題3）。また、⑦に記した視覚教材の活用も、この時間配分に組み込みがたい事項となり、細切れに20分程度の放映を3回だけにとどまった。見せたいビデオはいくつもあり、「知的好奇心を刺激（シラバス）」する上での有効ツールを講義の中に効果的に配置する工夫が必要である（→課題4）。

5. 課題への対応策

「日中関係論」は春学期講義であり、秋学期には同じ時間帯で「中国文化論」を講じる。若干の出入りはあろうが、ほぼ同規模の講義となることを想定し、上述した4つの課題に以下のように対応する。なお、宇佐見寛著『ガイドブック 大学授業の改善』（有斐閣選書）に教えられた点が多い。

課題1「遅刻」：春学期ではレポート講評時までは入室を認め、遅刻の解釈をゆるめた。突発の事態もあろうから、ここまでは認めるという説明をした。レポート講評は履修者の関心を集めるところで、その間の途中入室は大いに迷惑である。そのあたりを履修者に自主的に自覚してもらいたかった訳だが、それなりの効果はみられた。それでも毎回遅刻者はあり続け、遅刻公害もあり続けた。遅刻者は無くせない。そうであるならば、その公害を最小限に抑える措置を講じるべきであろう。入室一切不可とする対処もありえようが、非がどこにあれ、受講意欲をシャットアウトする措置は避けるべきである。途中入室の最大の害は、他の受講者の聴講を妨害する点にある。特に端の着席者は、内側の空席に遅刻者を座らせるためにわざわざ立ち上がって通してやるようなよけいなことを強いられる。そこで遅刻者がすぐに着席できる遅刻者用の席を設けることにする。幸い 3102 教室は入り口が教室前方だけなので、左側前方3列くらいを遅刻者席に指定して空けておき、遅刻者は左側入り口より入室させ、必ずそこに着席させる。ただし、このとりきめが遅刻容認と受け取られてはならない。遅刻は公害である。個人の問題ではなく公共への妨害行為である。学則違反である。してはならないことである。これは繰り返し口にすべきであろう。

ところで、遅刻者を減らすために最初にとるべき措置は、教員が遅刻しないことである。定刻前に教室に入り、前に座って履修者の顔でも眺めておき、チャイムと同時に立ち上がって話し始める。春学期を見る限り、大規模講義であっても、これは遅刻者減少にかなり効果的だった。

課題2「私語」：私語は公害である。私語をする者は、まわりの人に迷惑をかけていることを自覚すべきである。私語に気づいたら即刻退出させる。これを毎回講義のはじまりに述べる。それでも私語者は出てくる。春学期では一回目の注意までは許した。その結果、気づかないところで私語は続いていた。秋学期からは一回目の注意で退出を求める。「出て行きなさい」と言って、「出て行くまでは講義をしない」と言う。弁解や反論をしてきたら、「迷惑を受けたのは私ではない。まわりの人たちである。まわりの人が許すと言うなら許す。許す人

は手をあげなさい」と言う。おそらく手はあがらない。そこで、「はい、出て行きなさい」と繰り返す。

ところで、退出させることはもとより本意ではない。できるだけ教壇の前を離れ、ワイヤレスマイクを使って履修者の間を歩きながら講じるといった予防措置をとりたい。学生同士で注意しあえる風土作りも必要であろう。「シー」と声を出すだけでも効果はあるはず。自分たちの講義を自分たちで秩序管理する意識があまりにもなさ過ぎる現状は、やはり改善していくべきである。また、退出させる際は、とりきめを実行するのであり、怒りに任せて追い出すわけではないことをきちんと分からせる必要がある。

「おもしろい授業」をやれば私語はなくなると説く本がある。私語があるのは甘い授業をしている教員の責任であると説く本がある。何のとりきめもせずに、私語がまったくないという授業を紹介する本もある。そうなのであろう。ここに書いたのは手法としての私語対応であり、講義内容のチャームアップという対応を忘れてはならない。

課題3「レポート」：毎回の講義時間内でのレポート記述と提出はシラバスに明記したことであるが、春学期の反省をふまえて改めたいことを履修者に説明し、同意を得る。変更点は以下のふたつ。

① 時間中のレポート記述は行わず、次週提出の課題とする。

用紙はA4版400字詰め原稿用紙とし、字数は400字以内、つまり1枚までとする。氏名と背番号は字数外とし、欄外に書く。書く内容はその日の講義からの引用を基にせよと指導する。たとえば、「泉先生はこう言った」「プリントにはこうあった」「ビデオではこう言っていた」等と書き出して、引用（要約ではなく）を記す。次に、「そのとおりだと思う」「私はそうは思わない」「こんな別の見方もある」というように自分の考えを書かせる。そして、「なぜなら……」「つまり……」「それは……」と続けて、自分の考えの根拠を述べさせる。思考経緯や考えを書くのであり、講義内容を繰り返しても評価はしない。

誤字の有無をまず見る。きちんとした字で書いているかを次に見る。論理的

か、根拠があるか、表現は適切かを最後に見る。考え方の中身によって評価を左右することはない。次回講義時に朱を入れて返却する。ABC 評価を明記するが、この蓄積をそのまま最終評価とするわけではない。こういった手法でリテラシー指導とレポートの書き方指導の充実を図る。辞書や資料にあたる時間を与え、考える時間を十分に与えることもできる。また、講義中のレポート早書きもなくなる。

② 毎回の講義のおわりにミニツツペーパーを書き提出する。

記入項目は氏名と背番号と、何を「引用」して今週の課題を書くかの3点とする。他に自由記述欄を設け、わからないことや気になったこと、要望などを書かせる。出欠確認にこれをあてる。時間中に引用対象を決定しなければならず、講義への集中が高まることを期待する。レポートの記述を限定し、字数を制限したため、履修者との「やりとりツール」とはならない。自由記述欄をこれにあてる。

レポートは提出翌週の講義のおしまいに返却する。毎回「A」評価レポートのいくつかをプリントに転記して紹介し、記述のヒントとする。ミニツツペーパーの自由筆記欄に書かれた事項については、必要な場合に限りこれもプリントに返信を記載する。

課題4「視覚教材」: 春学期ではレポートでの反響を次回の講義内容にできるだけ反映させていた。また、時間配分に苦慮したこともあって、視覚教材を計画的に組み入れることが困難だった。そこで秋学期では、毎月の最終回にビデオ放映を約束し、講義の進行とは別立てで実施していく。見せたいビデオのリストを学期初めに履修者に提示し、4回程ある放映機会にどれを選ぶかは彼らの意向も反映させる。放映前週にはビデオの内容を説明し、予備知識を提供して興味と期待が抱かれるよう誘導する。

6. まとめ

私が担当する大規模講義はいずれも共通課目であり、全学部の学生が聴講する基礎教養科目である。そこで講義の内容を専門領域にまで深めず、むしろ領域は広く浅くして、日中関係や中国文化に対する履修者個々の興味や関心の芽を、知的好奇心へと変えることを目的とし、これをシラバスに明記した。身につけて欲しいのは知識自体ではなく、それを味わう力である。履修者は単に知ってしまうのではなく、いぶかって探求し究明せよとまでは言わないが、ここにはこんな疑念があると独自に認識し、知的関心事として心にとどめて欲しい。本稿では講義運営上の手法についてのみ述べてきたが、こんな思惑を反映させるため、講義内容にも私にとっては新しい試みを施している。したがって、ここに報告した大規模講義が今後どのようなようになっていくにせよ、手法だけの結果と言うことはできない。講義力の研鑽というのは、現場の状況をふまえた手法の更改と、講義目的をふまえた講義内容の更新を同時進行させるということなのだろう。ここに述べた対応策を秋学期に実行し、それに関する報告と検討を次回に行いたい。また、講義内容に関する報告と検討、語学授業に関する報告と検討も、いずれ公表したい。

サンプル①「講義の骨子」プリント左側資料分（14年度後期）

2002年9月24日

日中関係論 遣唐使（第一回）

1. 「遣唐使時代」とは？

第一回遣唐使…… 630年

遣唐使の廃止…… 894年

この間18回遣唐使は任命され、実際に派遣されたのは15回。

630、653、654、659、665、669、702、

717、733、752、759、七六一、七六二、777、779

804、838、八九四 漢数字は中止、斜数字は無事。

また、遣唐使の先駆といえる遣隋使は600～614年の間に4回派遣されている。

600、607、608、614

2. 「遣使」目的の変化

遣隋使以前の遣使（渡海）

小国分立の時代：57、107、239、266

半島進出の時代：369、391、413、438、478、479

半島撤退の時代：512、538、562、571

隋の中国統一…… 589

聖徳太子摂政…… 593

遣隋使以後の遣使

第一回遣隋使…… 600 ……新羅へ出兵

第二回遣隋使…… 607 ……僧侶の派遣。「日が昇る」国書

第三回遣隋使…… 608 ……留学僧・留学生の派遣。

大規模講義運営手法の現場報告と検討 (泉 敬史)

サンプル②-①「記述上の留意点」 プリント右側レポート提出分 (14年度後期)

学部	学年	クラス
学籍番号	氏名	評価

レポート作成上のヒント

- ① 自分の考えを記述し、そう考える理由を説明する。感想を書くのではなく、考えを書く。考えとは勝手に浮かぶものではない。自分で自分の考えを構築する努力が必要。
- ② 左頁に書かれたキーワードのどれかを選び、それについて考えをまとめてみると書き易くなるかも。
- ③ いくら頑張っても自分の考えがまとまらなかったら、どんな周辺知識があればまとめられるかと考え、そう思う理由と一緒にそれを書けばよい。立派なレポートになる。
- ④ それもむずかしい場合は、感想文でいいから書く。その場合、これは感想文である旨明記すること。次回はレポートを書けるように努力すべし。

ー 以下レポート記入欄 ー

サンプル②-②「背番号記入」 プリント右側提出分。記述上の留意点も変更した。

2003年6月3日 「天皇①」

番号	氏名	評価
----	----	----

レポート作成上の必要事項

- ① 講義を真剣に聴く
- ② 自分なりの興味や疑問点を見つける努力をする
- ③ 思考の過程を記す
- ④ 難しいとか苦手だとかに逃げない

レポート作成上のヒント

- ① 自分の経験に照らし合わせてみる
- ② 「もしも自分だったら」といった想像力を働かせる
- ③ どんな知識があれば思考が進むかを考える
- ④ 自分はなぜそう思うのかを考える

<レポート記述欄>

以下余白

サンプル③「シラバス」(15年度春学期・日中関係論)

この講座の目的は、中国や中国文化と日本との関わりについて学生諸君が抱いている漠然とした興味や関心を、より具体的な知的好奇心にまで高めることにある。守備範囲は日中両国の関係性、ならびに共通点相違点等の比較考察であり、それらを歴史上のさまざまな断面を捉えて講じていく。時代の配列に捕らわれることなく、二千年の時空を歩きつ戻りつしながら、そこに見られる日中関係上のさまざまな魅力的テーマを提案し、学生諸君の知的好奇心を刺激したい。講義は日本語で行うが、講義内容や教材の選択にあたっては、中国語履修者や履修志望者、留学生諸君の聴講にも配慮する。履修者の積極的な授業参加を希望し、質問や意見、提案を歓迎する。特に中国人留学生、中国文化圏に出自を持つ学生諸君が履修し、実体験に基づいた発言をしてくれることによる活性化を期待したい。

講義計画

おおむね以下の項目に沿って進めていく。テキストは特に定めず、適宜プリントや映像教材を使用する。

- ① ガイダンス・全体論
- ② 外交関係
- ③ 渡海者の往還
- ④ 大化改新と明治維新
- ⑤ 総論：古代の日中関係
- ⑥ 総論：近代の日中関係
- ⑦ 総論：現代の日中関係

成績評価について

毎回60分間を講義時間とし、残りの30分間でレポートを書き、提出する。レポートの内容と出席率により成績評価をする。なお、レポートの書き方についても指導する。

サンプル④「とりきめ事項」

2003年4月15日

「日中関係論」・その1

泉 敬史

とりきめ事項

- ① 入室時に携帯電話のスイッチを切る。
- ② 遅刻は認めない。いかに認めないかはだんだんと説明される。
- ③ ゆるやかな座席指定制とする。いま座っているそのあたりに毎回座るようにする。
- ④ 講義時間 90 分をだいたい 60 分と 30 分の 2 部に分け、1. 講義(+ビデオ) 2. レポート記述 にあてる。
- ⑤ 毎回のレポートを翌週の講義に積極的に活用する。時には A 評価のものを発表し、全員の記述上の参考とする。
- ⑥ 成績評価は毎回のレポートと出欠状況に基づいて行う。
- ⑦ なるべく多くビデオ上映の機会を設ける。講義内容に関連するものばかりとはせず、中国社会の理解を深めるものを取り上げる。

レポートの書き方

- ① まずは真剣に講義を聴く。そして自分なりの興味や疑問点を見つけようとする。
- ② そうやって見つけた興味や疑問点を自己分析する。「なぜ私は興味を持ったのだろうか?」「私が気づいた疑問点の答えはなんだろうか?」などについて思考する。
- ③ その思考の経緯を記述する。また、思考して分かったことがあればそれを書く。分からなかったら、「どうして分からないのか」「何を知っていれば分かるかもしれないか」を書く。こういったことが書かれていれば、それがレポートとなる。
- ④ 興味や疑問点が何も見つけられなかったら、「これは感想文です」と冒頭に書いた上で、講義に対する感想文を書く。感想文とは何か? 「面白かった」とか「○○ってすごいと思った」とか「むずかしくて分からなかった」とか、「ぜんぜん面白くないから興味を持てなかった」といった意見や、もっとこんなことを話して欲しいといった要望、単なる質問等である。なお、感想文は出席点としてのみカウントするが、記述内容は次回以降の講義の参考としたい。
- ⑤ レポートあるいは感想文の提出をもって出欠確認をする。

..... 切り取り

フリガナ

氏 名:

座席番号:

学部学科学年:

学籍番号:

講義への要望等 (なんでもいいから必ず何か書くこと)